

連載
令和新時代
医療への事務的アプローチ

メディカル・データ・ビジョン株式会社

広報室 汲田 玲未衣

第 63 回

改定で DX 導入の後押し ～音声 AI ツール「カタナシ」で変わる診療現場～

人工知能（AI）が診療の現場を変えようとしています。2026年度診療報酬改定では、医療 DX（デジタルトランスフォーメーション）や ICT の活用で施設基準を緩和するような個別改定項目が盛り込まれ、DX 導入の後押しとなることが期待されます。AI の活用で変わる医療の現場を追いました。

10%の時短が生む30%の心の余裕

大阪府吹田市にある社会医療法人愛仁会（高岡秀幸理事長）が運営する井上病院（辻本吉広院長）では、2026年1月に株式会社 AIBORN（東京都中央区、代表取締役：外山将平）が開発する音声 AI ツール「カタナシ」を導入しました。旗振り役となったのが、2024年4月に新設した総合内科の部長である濱田治医師です。

総合内科では複数の可能性から診断をつけるため、丁

寧に問診をすることが重要です。また、同院とその附属診療所では600～700人の透析患者が通院しています。透析患者と治療の意思決定をするための対話が1時間に及ぶこともあり、医師や看護師、臨床工学技士は膨大な記録業務に追われていました。こうした病院全体の記録業務の多さを解消するため、カタナシの導入に踏み切りました。

カタナシは会話を文字に起こし、SOAP（S＝主観的



▲カタナシの画面イメージ

情報、O＝客観的情報、A＝評価、P＝計画）形式などに自動で要約します。カタナシは、診察室で患者を前に、問診などをしながらカタカタとパソコンのキーボードをたたいた音である「カタカタ」をなくすという意味で命名されました。濱田医師によると、カルテ入力にかかる時間の削減幅は10%程度ですが、心理的負荷は30%ほど軽減したといいます。

カタナシが診療記録を自動生成する間に、検査オーダーの発行や次の診察の準備ができるようになりました。午前中の診察が早く終わるようになり、疲労感が劇的に改善しました。また、患者の目を見て診察をできるようになったという実感のみならず、患者からの「とても丁寧な先生だ」という声も増えました。

多国籍診療や教育でカタナシを活用

カタナシの真価は、言語の壁を乗り越える場面や教育の場でもそれぞれ発揮されています。総合内科で日本語を話せない中国籍の患者を診察することがありました。同行した通訳を介し、問診をした内容とカタナシが聞き取った中国語の内容を照合した結果、患者の意図をくみ取れていることが分かり、濱田医師は「互いが分かり合えていたことを確認できた。医師として最高の体験だ」と振り返りました。

また指導医の下で実臨床を学ぶ実習であるクリニカル・クラークシップとして、今年の1月から大阪大学の医学生6人を受け入れています。模擬診療で医学生の問診内容とカタナシが出力する診療記録を比較することで、診断プロセスの学習に役立てています。今後は、ベッ



▲若手医師と話す濱田医師

ドサイド研修で学生にカタナシを持たせ、指導医がすぐにフィードバックをできない状況でも問診内容が正しかったかを学生自身が振り返ることができるよう、活用を進めていく方針です。

若手医師がカタナシ導入を推進

東京都板橋区にある IMS グループ医療法人社団明芳会（中村哲也理事長）が運営する板橋中央総合病院（加藤良太郎院長）では、2025年11月から救急総合診療科でカタナシを活用しています。同科の診療部長である安本有佑医師は、カタナシ導入のプロジェクトリーダーを30歳の若手医師である全剛史医師に任せることにしました。安本医師は「全先生に任せたことが導入成功のカギだった」と振り返ります。

全医師は、チーフレジデントと呼ばれる若手医師をまとめる役割も担います。AIなどの最新技術に関心を持ち、進んで活用することができ、なおかつうまく人とかわることができる人材だったため、安心して任せることができたといいます。

全医師は、まず自分がカタナシを使ってみて感じた可能性を科内で共有し、利用を促しました。チームメンバーが患者や家族への病状説明（IC）の記録などに大幅な時間を取られている現状を目の当たりにし、なんとか解決したいという思いがありました。「効率よくできることが分かった以上、無駄は省きたい。そんなシンプルなモチベーションだった」と振り返ります。安本医師は「繰り返し言わないと人を動かすことはできない。周りにとにかくしつこく働きかけてくれた」と全医師をねぎらいます。



▲カタナシの画面を見る全医師（左）と安本医師



▲カタナシの画面を見る廣瀬理事長

すべての記録をカタナシで

同院では、記録を残したいさまざまな場面でカタナシを活用しています。カタナシが会話を文字に起こし、SOAP形式などに自動で要約し、二次元コードリーダーで読み取ることで電子カルテに反映することができます。

医師1人あたり、平均20～30分のICを1日1～2件実施しています。これまでは会話の記録に30分ほどかかっていたうえ、途中でほかの業務が舞い込むと記録業務自体が後回しになってしまうことがありました。カタナシの活用により、自動生成された記録を5分ほど修正することで作成できるようになり、週2～3時間の業務削減につながりました。

また、救急受け入れ要請があったときにカタナシを起動し、救急隊からの連絡を記録する試みも始める予定です。それによって、受け入れ時には、救急隊の情報が記録されているだけでなく、救急隊の院内滞在時間を短縮することも期待されます。転院搬送となる場合もカタナシが役立つといいます。転院先への相談内容をカタナシで記録し、診療情報提供書モードに切り替えることで、速やかに文書を作成し申し送りをすることができます。

カタナシを活用している医師からは、「ツールの使用について患者からのクレームは一度もなく、記録を見せるとむしろありがたいと言われる」「慣れるまでに時間がかかったが、慣れるとツールが無いことに苦痛を感じるようになった」「ICは客観的な情報が多くなるので、ツールを活用することで脚色されづらくなり、伝わりやすくなった」などの声があがっています。

今後は、若手の医師が多い診療科、職員の多い看護部

や、電話対応の多い地域連携室・医療相談室での活用も目指します。地域連携室や医療相談室では、電話でのやり取りが記録に残っていないことが多く、トラブルの元になりやすいといいます。電話でメールアドレスを聞き出し、文章に残すこともあります。

カタナシを活用することで会話の内容をカルテに記録できれば、こういった業務時間を削減することが期待されます。安本医師は「どの病院でも人材不足が深刻だ。ツールに任せられる部分は任せていきたい」とさらなる活用の構想を練っています。

見守るリーダーシップ

神奈川県相模原市にある医療法人社団守成会（廣瀬憲一理事長）が運営する広瀬病院（河野悟院長）では、2025年3月からカタナシを活用しています。

同院では当初、病棟看護師の残業が常態化し、特に1日当たり1時間ほどかかっていた記録業務の時間削減が課題となっていました。全職員にスマートフォン（スマホ）を支給していたことから、スマホで使用できるカタナシを導入することでの課題解決を図りました。

しかし、看護部での導入は一筋縄ではいかなかったといいます。看護師の多くがタイピングに慣れており、ボイスメモの活用への抵抗感があったといいます。そこで、活用を無理強いせず、いつでも使える状態にして個人の判断に任せることにしました。

看護師がナースステーションでICを実施する際に、ナースコールが鳴ったり患者家族から声をかけられたりと中断することも多くあります。その場ですぐに記録を

まとめられずにすべての業務が終わった後に記録をするのが日常茶飯事です。そこで、カタナシで記録を残すことで、記憶に頼らず文字化をすることができるようになり、その作業にかかる時間を短縮できただけでなく、病室（ベッドサイド）で患者を看る時間が増えたといえます。

看護部 3 階病棟看護師長の長田美智氏は、「記録を早い段階で部内に共有できるようになり、患者や家族の思いをくみ取ったうえでの声かけがしやすくなった」と話します。特に療養病床では、当初 30 分程度あった残業時間がほぼ無くなったといえます。

同院でカタナシの活用が最も進んでいるのが外来診療です。内科ではすべての診察で活用しており、廣瀬理事長自身も日々の診療で活用しています。時間効率として 15～20% ほど上がり、同じ時間枠で診察できる患者数が 10 名ほど増えたといえます。特に生活習慣病の指導記録など、義務化されている記録が自動化されることで、診療そのものに集中できるようになりました。

カタナシの「すごい」を体験

カタナシの導入を検討する際、実は現場からは他製品

を導入したいという声上がり、廣瀬理事長は両ツールを試験的に導入することを決めました。ツールを自由に体験・比較できる環境を整え、全職員が「まずは使ってみる」ことを最優先にしました。

この時も無理に使わせることはせず、検証にじっくり時間をかけました。カタナシの活用が進むと、多くの職員が見る電子カルテの記録を通じて、詳細な記録が素早く残せているということが職員間で共有されていきました。廣瀬理事長は「こんなにすごいのだ、を多くの職員が体験し、利便性に気づくのを待った」と振り返りました。

今後は、看護部での活用頻度の向上を目指します。また、眼科や整形外科のように会話ではなく視覚的な所見が重要となる診療科での活用方法を模索する方針です。

カタナシは単なる時短ツールにとどまらず、医療の質を担保し、職員の心身の余裕を生み出すための心強いパートナーとなりつつあります。病院全体を巻き込んだ組織横断的なプロジェクトが、ツールをうまく活用するカギとなるでしょう。❶

※記事中の取材対象者のご役職・ご肩書は、今年 2 月の取材当時のものです。

いまさら聞けないシリーズ第3弾！

いまさら聞けない病院経営3

～Genbaマネジメント20のメソッド～

小松本 悟・著 A5判／143頁

定価2,640円(税込) 本体2,400円 ISBN 978-4-86326-388-8

人が動く Genba編

お問い合わせ・ご注文は

産労総合研究所 出版部 経営書院
TEL 03-5860-9799 FAX 0120-73-3641

詳しい内容はホームページで！

書籍 産労

検索

